

大分大学教職大学院

ホームカミングデイ新企画：「教育実践の探究」で修了生支援

(教職大学院セミナー：「環境の変化に即応する学校の教育実践を探究する」)

教職大学院セミナーの目的：

修了生アンケートの中に見られる「修了後の継続学修」へのニーズにこたえるべく、令和5年度より新たに教職大学院セミナーをホームカミングデイに組み込んで実施した。修了生及び在学生の教育実践報告を題材に、学界で活躍する外部講師から「最新の知見に基づく講評」をいただきながら、グループディスカッションによる省察的で深い学びに誘うことを目的とした。

セミナーの内容：

本セミナーは2本の報告と講評、グループディスカッションという構成とした。①修了生の岡田豊校長（当時佐伯市立米水津小学校）より小規模校における学校経営について、②学卒院生(当時)の宮重拓歩さんよりオートエスノグラフィーという研究手法による実習生としての学級経営への参画について報告があり、それを受けて、福本昌之教授（当時広島市立大学）と藤井佑介准教授（長崎大学）から講評をいただいた。その後のグループディスカッションも報告と講評から刺激を受けて、大いに盛り上がった。

日程・参加者等：

令和5年7月29日(土)14:30～17:00に実施し、参加者は48名、うち本学大学院関係者26名、現職教員22名であった。

成果と課題：

コメンテーターを外部講師に委ねることで、ホームカミングデイの趣旨でもある「修了生と本学教員との交流の場」が十分確保できた。一方、最適な開催時期を設定したつもりであったが参加者数が予想より少なかった。さらなる工夫を凝らしたい。



(左)岡田豊校長、(右)宮重拓歩院生の報告の様子。質疑応答の時間には、現職院生や学卒院生から自身の教育実践研究の問題意識に沿った質問や意見がひっきりなしに出されるほど活気溢れる時間となった。

藤井佑介准教授の講評の様子。主に宮重さんの教育実践研究について触れ、学卒院生が実習生として学級経営に参画しようとする果敢なチャレンジに対して賛辞を送った。その中で、特にひとりよがりにならない「省察（リフレクション）」が鍵を握っており、宮重さんのそれまでの教育観や学級観、子供観等が、実践研究によって再構成されるプロセス自体に大きな意義があると講評した。



グループディスカッションの様子。グループ構成は、本学教員と本学院生そして現職教員が混成となるようにして、相互に学び合える環境を整えた。報告が刺激となり、研究的な視点で現任校の学校課題を見直したい、との発言等も出てきた。

「目の前の課題への対応に追われ、省察する間もなく次の課題へ向き合わなければならない」という現職教員の発言にハッとさせられた。地域に根ざす教職大学院の役割を再考したいと感じた。

本研修は教職員支援機構の「NITS・教職大学院等コラボ研修プログラム支援事業」に採択されて実施したものである。